

# 地域に暮らす障がい児への発達支援

—サロンでの交流を通じた学生の学び—

菅原 美保・小橋 拓真・村上 優衣・鹿内 あずさ

**抄録：**本研究の目的は、北海道文教大学スマイル・プロジェクトに参加した学生が障がい児とその家族への支援活動を通じて得た学びの内容を分析し、今後のプロジェクトの活動や学生教育への示唆を得ることである。対象者は 2022 年度の本プロジェクトに複数回参加した学生で、人間科学部看護学科・子ども発達学科・作業療法学科の学生計 4 名であった。支援活動の終了後に記述した質問紙（学びのレポート）により得られたデータを質的記述的に分析した。学生は本プロジェクトにおいて、【児との関わりへの困難】を感じるが、徐々に【児の強みへの気づき】があり【保護者から得る関わりのヒント】をもとに【児の個性にあったコミュニケーションの工夫】を考え実践していた。この経験は、学生自身の成長へと繋がり、在学中の学習意欲を高めることが明らかとなった。今後も本プロジェクト活動の頻度を増やし、知識や技術が深められるように学生を支援することが示唆された。

**キーワード：**学生，障がい児，発達支援

## 1. はじめに

近年、救急医療や新生児医療の医療技術の進歩に伴い医療的ケア児（日常生活及び社会生活を営むために恒常的に医療的ケアを受けることが不可欠である児童のこと）が増加している。また、全国の在宅の医療的ケア児は、推定約 2 万人（厚生労働省, 2021）にも上り、各地域では、そこに暮らす医療的ケア児とその家族の支援に向けた取組みが実施されている。

本学では、2017 年より障がい児や医療的ケアを必要とする子どもとその家族への支援活動を目的とした北海道文教大学スマイル・プロジェクト（以下、本プロジェクト）を行っている。この活動は、医療系・教育系 5 学科の教員と学生が連携し、大学の位置する恵庭市を中心に展開している。その活動の中で、教員と学生は恵庭市近隣の A 市の介護ママの会（2017～現在）で、重度肢体不自由児者・医療的ケア児親子交流サロン『any』において、障がい児やその家族とともにイベントに参加し支援活動を行う貴重な体験活動をしている。

『any』に参加する障がい児は、言語的コミュニケーションが取れる児から人工呼吸器を装着している児など、障がいの程度は様々ではない。本プロジェクトへの参加学生は、障がい児と共に手作りアロマキャンドル



写真 1 4 月 手作りキャンドル



写真 2 12 月クリスマスツリー飾りつけ

ル（写真1）やクリスマス会（写真2）などを通じ、障がい児に積極的に関わり活動を実施していた。今回、学生の活動実践後のレポートを用いてどのような学びを得たのか検討できると考えた。

本研究の目的は、本プロジェクトに参加した学生の、障がい児とその家族への支援活動を通じて得た学びを分析し、今後のプロジェクトの活動や学生教育への示唆を得ることである。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

対象は、2022年度の本プロジェクトに参加した学生で、人間科学部看護学科・子ども発達学科・作業療法学科の学生計4名である。

### 2.2 データ収集方法

研究の趣旨に同意が得られた学生に対して、支援活動の終了後に学生が記述した質問紙（学びのレポート）の内容をデータ化した。

### 2.3 分析方法

学生が、支援活動の終了後に記述した質問紙より得られたデータを質的記述的に分析した。質問項目は以下である。

- 1) 病気や障がいをもちながら生活している児に関わって感じたこと
- 2) 障がい児との関りで難しく感じたところ
- 3) 障がい児への関わりの工夫
- 4) 障がい児の強み
- 5) 障がい児との関り前後での自分自身の変化
- 6) スマイル・プロジェクトに参加した感想や今後の取り組み

### 2.4 倫理的配慮

本研究は、北海道文教大学の倫理審査委員会の承認（第30024号）を受けて行った。研究協力学生には書面と口頭で研究の趣旨と成績評価への影響がないことを説明し、書面にて同意を得た。また、対象の障がい児とその保護者に対して、研究者から書面と口頭で説明し、了承を得た。

## 3. 結果

COVID19が感染症法で5類となったが学生はマスクを着用し、感染予防に配慮しながら本プロジェクトにおいて障がい児とその家族に対する活動を行った。4名の学生が記載した質問紙（学びのレポート）から、4つのカテゴリー、7つのサブカテゴリーが抽出された。以下カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》，学生の記載を「」で示す。（表1）

表1 イベント交流を通じた学生の学びのカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
児との関わりへの困難	コミュニケーションや関わりについての困難	会話や感情を表現できない対象者の方との関わりは、ある程度相手の感情を想像するより他ないというところが難しい
		どのような病気や障がいを持っているか分からず、接し方がわからないため難しい
		手の動きや表情から気持ちや意思を読み取るところが難しい
		障がい児のできることとできないことを見分けることが難しい
		障がい児はできるのに過度な手伝いにならないように関わるのが難しい
児の強みへの気づき	障がいに関係なく一緒に楽しむ	話しかけられた大人や友達と会話を楽しむこと
		製作する過程を共有することで、ものづくりを楽しむことが出来ると感じた
		大学での出来事や、TV で放送されているドラマ等、会話を楽しむことができた
	障がい児の持てる力への理解	車椅子でも通学もできるし、会話やスマホの操作もできる。
		自分の障害を理解し、自分でできるように工夫して作業を行うこと
		障害や病気を持っていることで不便を感じながらも毎日の生活を楽しく送っていることをとても感じた
		努力（工夫）をして、自分のできることを広げられる
		障がいがあっても大学に進学するというチャレンジするという行動力がある
		自分ができないことは、しっかりと周りに頼める
		自分で好きな色やものを選択できる
		自主性がある
		発語が難しくても、手の少しの動きや顔の表情等で「違う」「嫌だ」「嬉しい」「恥ずかしい」等の感情を伝える
		コミュニケーションの中で自分の気持ちや考えを伝えられる
		一人ひとりの方法で楽しさを表現できる
		笑顔で明るく周囲の人とコミュニケーションを取る
		興味のあることを周囲の人と共有できる
児の個別性にあったコミュニケーションの工夫	障がい児の捉え	障害や病気を持っていることで不便を感じながらも個性がある
		会話が出来る方達には、難しさを感じなかった
		実年齢よりも少し幼く感じるがあった
		障がいを持っているから〇〇が出来ないと考えない
	児の視線や距離感を考えたコミュニケーションの工夫	製作をする時は、児がしっかりと製作物を見ることが出来るか、児の視線に配慮して、見やすい位置で製作するようにした
		対象児の興味のある話をする
		対象児の話すスピードに合わせて、ゆっくり話す
		相手に視線や会話のスピードに合わせて会話をする
		自分に慣れてもらうように、適度に話しかけ、近くにいる時間を増やした
		障がいを持っているから〇〇が出来ないと考えず、関わり方を工夫する
		障がいを持っているが関わり方を工夫したり、その児にとって出来ることを考えることが大事
	児に合わせた関わり方の工夫	過度な手伝いにならないように関わる
		個性を尊重する関わり方をすることが大切
		表情や手の動きを介してコミュニケーションを取ることができた（ときに、喜びを感じた）
保護者から得る関わり方のヒント	保護者の関わり方の観察から児への関わり方のヒントを得る	児とその親の関りを観察して、関わり方の参考にした
		保護者の方達は最大の理解者として同じく立ち向かっている
		保護者の方は、互いに情報交換やネットワーク作りをして、孤立しないように努めている

### 3.1 【児との関わりへの困難】

このカテゴリーは《コミュニケーションや関わりについての困難》の1つのサブカテゴリーから構成されている。

「どのような病気や障がいを持っているか分からず、接し方がわからないため難しい。」と事前情報が得られていないための困難さや「会話や感情を表現できない対象者の方との関わりは、ある程度相手の感情を想像するより他ないというところが難しい。」というように、学生は障がい児の表現方法が理解できないと《コミュニケーションや関わりについての困難》を感じることがわかった。

### 3.2 【児の強みへの気づき】

このカテゴリーは《障がいに関係なく一緒に楽しむ》《障がい児の持てる力への理解》の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

「自分で好きな色やものを選択できる.」「発語が難しくても、手の少しの動きや顔の表情等で『違う・嫌だ・嬉しい・恥ずかしい』等の感情を伝えること.」「障がいがあっても大学に進学するというチャレンジするという行動力がある.」のように、学生は障がい児の意思や表現方法といった《障がい児の持てる力への理解》を感じていた。また「製作する過程を共有することで、ものづくりを楽しむことが出来ると感じた」「興味のあることを周囲の人と共有できる.」のように学生は、障がい児と関わる過程で《障がいに関係なく一緒に楽しむ》時間を共有していた。(写真3)



写真3 10月 マラニック

### 3.3 【児の個別性にあったコミュニケーションの工夫】

このカテゴリーは《障がい児の捉え》《児の目線や距離感を考えたコミュニケーションの工夫》《児に合わせた関わりの工夫》の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は「障害や病気を持っていることで不便を感じながらも個性がある」「障がいを持っているから〇〇が出来ないと考えない」のように、学生は障がいを個性と捉えると同時に、学生自身の先入観の《障がい児の捉え》があったことに気が付いていた。また「相手に目線や会話のスピードを合わせて会話をする.」「自分に慣れてもらうように、適度に話しかけ、近くにいる時間を増やした.」というように《児の目線や距離感を考えたコミュニケーションの工夫》を行い、障がい児の個性を見極めて《児に合わせた関わりの工夫》を考えて実践していたことが明らかになった。(写真4)



写真4 11月 ハンドマッサージ

### 3.4 【保護者から得る関わりのヒント】

このカテゴリーは《保護者の関わりの観察から児への関わりのヒントを得る》の1つのサブカテゴリー



リーから構成されていた。

学生は「児とその親の関りを観察して、関わり方の参考にした」ように保護者を関りの手本としていた。また「保護者の方達は最大の理解者として同じく立ち向かっている」「保護者の方は、互いに情報交換やネットワーク作りをして、孤立しないように努めている」というように、保護者の背景や努力を感じ取っていた。

## 4. 考察

### 4.1 障がい児とのコミュニケーションや関わりの困難から理解を得られる過程

最近では、SNS やチャットなどのコミュニケーションツールが浸透し、20 代の学生にとっては生活から切り離せないものとなっている。このような社会背景を受け、学生の対人関係のスキルが低下（廣瀬ほか 2011）していると報告されている。このようなコミュニケーションスキルが未熟な学生にとって、障がい児とその母親と関わりを持つことは難易度が高い機会だと推測する。

清水（2012）の先行研究では、障がい児と関わる機会が無いため、関わりに不安をもち、ネガティブなイメージをもちやすいという結果が報告されていたが、本プロジェクトに参加した学生も同様に、障がい児とのコミュニケーションに不安や困難を感じていた。特に初対面の児については、児の特性が分からず不安や戸惑いの感情が大きかったと推測される。言語的コミュニケーションが難しい児であると関わりそのものが困難である（佐藤ほか 2017）と述べているように、本学の学生も会話の成立が困難な児や感情が読み取りにくい児には、特に難しさを感じていた。また、コロナ禍の活動であったため、学生は常にマスクを着用していたが、口元が隠れていたため学生自身の表情が障がい児に伝わりにくく、お互いに感情が読み取りづらい状況にあったことがいえる。しかし、学生は注意深く児とその家族などの周囲の関わり方を観察し、児とのコミュニケーションを取る際に保護者の真似をする所から始めていた。目的を持った観察だからこそ、児の表現方法やできることに個性があることに気づけたと考える。その結果、困難さを感じていた障がい児と、非言語コミュニケーションをとれるようになり、一緒にイベント活動を楽しんでいた。また学生は、関わりの中で児の強みを見出すことができ、障がい児への理解を深めていた。

### 4.2 学生が志す専門職としての成長

重度肢体不自由児者・医療的ケア児親子交流サロン『any』は、様々な障がいがある児と保護者が参加している。毎回参加する児は異なるため、学生は障がい児の事前情報がないまま参加をすることになるため、学生自身がその場で何が必要なのかを考え、適切な行動をとることが求められた。学生はコミュニケーションの困難さを感じつつも、自分で関わりの情報や手がかりを集めることができ、個性を捉えた関わりを持つことができていた。この成果は、学生の職業人としての自覚を促すと共に、学生が児と関わる際の自信につながったと考える。加えて、2022 年度はコロナ禍において活動から実践能力を養う機会に恵まれなかったことが続き、学生自身が通常の学習以外の活動に出向く機会の制限があるなかでの、このような体験は学生自身の成長へと繋がる貴重な活動となったと考える。今後は活動の頻度を増やし、知識や技術が深められることを実感できるように取り組んでいきたい。

## 文献

- 廣瀬春次・太田友子・井上真奈美・中村仁志, 2011, 「看護学生のコミュニケーション行動に関する研究」『山口県立大学学術情報』 4: 47-53.
- 厚生労働省：医療的ケア児等とその家族に対する支援対策, [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaishahukushi/service/index\\_00004.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/index_00004.html)（アクセス日：2023年12月21日）
- 村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大, 2021, 「地域に暮らす障がい児（者）への発達支援—ミニ運動会の企画経営を通しての学生の学び—」『北海道文教大学論集』 22: 107-112.
- 介護ママの会：<https://www.facebook.com/ebetukaigomamanokai/>（アクセス日：2023年12月21日）
- 中野岬, 2021, 「言語的コミュニケーションが困難な重症心身障害児との関わりによる看護学生のコミュニケーションの変化」『日本赤十字九州国際看護大学紀要』 19: 21-35.
- 佐藤寿哲・藤本美穂・西順子・黄波戸航・吉川彰二, 2017, 「小児看護学実習における重症心身障害児施設での学生の学び—コミュニケーションと小児看護学特有の学びに着目して—」『大阪青山大学看護学ジャーナル』 1: 27-35.
- 鹿内あずさ・小塚美由記・村上優衣・笠見康大・白幡亜紀・服部裕子・佐藤明紀, 2021, 「地域に暮らす障がい児（者）への発達支援—北海道文教大学スマイル・プロジェクトの取り組み—」『北海道文教大学論集』 22: 91-100.
- 清水史恵, 2012, 「小児病棟以外の場における小児看護実習での学生の学びに関する国内文献の検討」『日本小児看護学会誌』 21(3): 71-77.

## **Developmental Support for Children with Disabilities Living in the Community**

### **—Learning for students through interaction at the salon—**

SUGAWARA Miho, KOHASHI Takuma, MURAKAMI Yui and SHIKANAI Azusa

**Abstract:** The purpose of this study is to analyze the learning of students who participated in the Smile Project through their support activities for children with disabilities and their families, and to obtain suggestions for future project activities and student education. The subjects were students who participated in the Smile Project in the fiscal year 2022, consisting of a total of four students from the Department of Nursing, the Department of Child Development, and the Department of Occupational Therapy in the Faculty of Human Sciences. The data obtained from the questionnaires written after the completion of the support activities were analyzed qualitatively and descriptively. The students experienced difficulties in interacting with the children during the support activities, but gradually became aware of the children's strengths. Then, based on the hints they received from their guardians, they thought of ways to communicate with the children in a way that suited their individuality and were able to put them into practice. Since this kind of experience is an activity that leads to the students' own growth, it is suggested that the frequency of such activities should be increased in the future, and the students should be supported so that their knowledge and skills can be deepened.

**Keywords:** students, children with disabilities, developmental support